

はもちろん、刑務所もあり弁護士までいたいらしい。空からの偵察があるから、彼らは常に移動を続けなければならなかったのは当然。そんな生活を続けながら、1200人ものユダヤ人が生き延びたことは大きな奇跡。さあ、そんな三兄弟の物語をじっくりと。

ベラルーシとは？

旧ソ連邦の支配下にあった東ヨーロッパの民族や国々は、1939年9月1日のナチスドイツによるポーランド侵略から始まった独ソ戦争と1980年代のソ連邦解体によって大きな影響を受けた。現在、西側をポーランドに接し、北西をリトアニアとラトビアに、北東をロシアに、そして南をウクライナに接するベラルーシ共和国は、ミンスクを首都として1991年に誕生したスラブ民族の国。

そんなベラルーシ共和国には広大な森が多いらしい。ちなみに、1991年12月8日にソ連邦の解体がロシア、ウクライナ、ベラルーシの三首脳によって宣言されたのはペロヴェーシの森。ネット資料によれば、ベラルーシの天然資源は森林で、国土の45.3%もの面積を占めているらしい。そしてこの映画には、リピクザンスカの森、ペレラズの森、ナリポッカの森が登場するが、島国日本で生まれ育った私たちがその場所や大きさをきちんと把握できないのは残念。

映画冒頭のスリリングな展開は？

日本人にはわかりにくいのが、映画冒頭の舞台は1941年8月にドイツ軍によって占領されたベラルーシのまち。ナチスのユダヤ人抹殺計画に沿ってユダヤ人狩りを始めたナチス親衛隊と地元警察の手によって、トゥヴィアたち三兄弟の両親は殺されてしまったが、三兄弟は辛うじてリピクザンスカの森へ逃げ込んでいった。そこには既に何人かのユダヤ人が逃げ込んでいたうえ、さらに次々と逃げ込んでくることに。

森の中は当面安全そうだが、食料も身を守る武器もない。そこでそれを手に入れるため、トゥヴィアは夜の暗闇に紛れて父親の親友だったコスチュク（ジャセック・コーマン）を訪ね、協力を求めることに。そこに登場したのが、ユダヤ人狩りを楽しんでいる地元警察のベルニッチ。とっさに納屋に身を隠したトゥヴィアは発見を免れたが、もしユダヤ人たちを匿っていることがバレたら、コスチュクはどうなるの？さらにコスチュクからピストルと4発の弾を入手したトゥヴィアは、両親を殺したのがベルニッチであることを知り、ベルニッチとその2人の息子に対して復讐を遂げたが、それでトゥヴィアの心は晴れるの？また、ここまで派手に復讐劇をやれば、森の中への追及が激しくなるのでは？

映画冒頭からそんな緊張感を伴いながらスリリングなシーンが展開されるが、私が感心するのは森の広さ。その時点ではさすがのドイツ兵もこんな広い森の奥深くまでは探索に来ないようだが、いずれ近いうちに・・・。

トゥヴィアとズシュの意見の対立は？その和解は？

老人や女子供をたくさん含む集団の中で、最も行動的なトゥヴィアとズシュがリーダー格になったのは当然だが、森の中への逃避者が増えるにつれて顕著となったのがトゥヴィアとズシュの意見の対立。「ピエルスキ・パルチザン（民衆による非正規軍）」と名乗るのは勝手だが、ホントに銃で武装して農家から食料を奪ったり、ドイツ軍と銃撃戦を展開するのもやむなしと主張するのが次男のズシュ。これに対し、銃撃戦の中で三男アザエルを行方不明にしてしまったトゥヴィアは「生き残ることが復讐だ」と宣言し、「可能な限り自由に生き、生きようとして命を失うなら、それは人間らしい死に方だ」と主張した。

さあ、集団の実質的リーダーである2人の意見の対立はその後どんな展開に？また、2人の和解は？

1人目、2人目、3人目の女性は？

食料品をもらうためコスチュクの家を訪れたトゥヴィアたちが見たのは、ユダヤ人を助けたことを理由にして吊るされ殺されているコスチュクの姿。しかし、コスチュクの妻が案内してくれた別の隠れ家にはアザエルが生きて匿われていた他、ベラ（イーベン・ヤイレ）とハイア（ミア・ワシコウスカ）という若いユダヤ人女性も。密室の中で何日が過ごした縁ではないだろうが、後に森の中でみんなから祝福されながらアザエルと結婚することになるのがハイアだ。

ついでに併せて紹介しておくと、森の中での生活が長くなれば、いくら悲惨な状況下でも男女の恋が芽生えてくるもの。リーダーとなったトゥヴィアが宣言した「憲法」の1つは、男女の恋愛はオーケーだが妊娠は厳禁ということだったが、映画中盤にはそれに違反(?)する女性も……。それはともかく、先に妻の死亡を聞かされたのは次弟のズシュ。ズシュが妻子を置いてきた町ホロディッシュからの逃避者の証言によると、3000人のユダヤ人が殺され、50人だけ生き残ったが、その中にはズシュの妻子はいなかったらしい。続いて、ノバグルドクの町から逃げてきた同胞から妻の死を聞かされたのがトゥヴィア。

予想されたこととはいえ、そんな悲報を聞くのはつらいこと。2人はそんな悲しみを胸に秘めて日々同胞たちが生き残るための活動を懸命に続けていたが、そんな中でも必然的に生まれるのが男女の恋。その結果ズシュはベラと恋におち、トゥヴィアはリルカ（アレクサ・ダヴァロス）と恋におちたが、トゥヴィアとズシュの意見対立が激化する中、3人の女性たちの行く末は……？

興味深いソ連赤軍（パルチザン）の姿

第1次世界大戦におけるドイツとフランスの戦いは、エーリヒ・マリア・レマルクの

小説『西部陣線異状なし』で有名だが、第2次世界大戦におけるドイツとソ連の戦いを描いた映画の傑作は、『スターリングラード』(00年)(『シネマルーム1』8頁参照)。また、ボリス・バステルナークの小説を映画化した『ドクトル・ジバゴ』(65年)は、第1次世界大戦からロシア革命に至る激動の時代を生きる主人公たちの姿が感動的だったが、『ディファイアンス』では第2次世界大戦突入直前のナチスドイツが優勢な時期に、ソ連赤軍がバルチザン闘争を展開している姿は興味深い。

1948年に建国されたイスラエルは国民皆兵制度をとり、アメリカの支援の下で強力な軍事国家となったが、それまでのユダヤ人は商売はうまいが戦争はまるでダメとされていた人種。それに対して、血で血を洗う社会主義革命の中で生まれたソ連の軍隊(赤軍)は、中国の人民解放軍と同じように強いのは当然。そんなソ連赤軍(バルチザン)の指揮官ヴィクトル・パンチェンコ(ラビル・イスマノフ)の人物像とその戦いぶりは興味深いので、是非じっくりと観察してほしい。

偵察に出たトゥヴィアとズシュが取り囲まれたのがパンチェンコ指揮下のソ連赤軍だったが、パンチェンコとの面会の後、トゥヴィアとズシュの進む方向が明確に分かれてしまうことに。つまり、「ピエルスキ・バルチザン」から兵を提供することを条件として、パンチェンコの指揮下に入ることを許可されたズシュは、本格的なユダヤ人部隊としてソ連赤軍下に入ることに。

他方、あくまで森の中の逃避者を守り、生き残ることを最大のテーマとするトゥヴィアは森の中へ戻ったが、片腕ともいべきズシュを失った後、ずっとリーダーとしての地位を確保できるの？

リーダーの地位をめぐる内部闘争は？

自由・平等・博愛をテーマとした1789年のフランス革命以降、次第に近代民主主義国家が増えていったが、そんな国のリーダーたる大統領や首相は、憲法を頂点とする法律にしたがって選挙で選ばれるもの。しかし、ソ連(ロシア)や中国、キューバなどの共産主義国家はそうではない。しかし、ナチスドイツから逃れて森の中で息をひそめながら暮らしているたくさんの逃避民たちのリーダーはトゥヴィアだが、これは自然発生的に選ばれたもの。

1月3日に観た『動物農場』(54年)は、強欲な権力者たる農場主ジョーンズ氏を倒した後、次のリーダーをめぐる2匹の豚が争い、結局ナポレオンという名前の豚が独裁的権力を握ってしまう「寓話」だったが、さて森の中は？もちろん、トゥヴィアの統治が順調に行われている間、すなわち、安全と食料が保たれている間は不平不満は起きないが、極寒の冬を迎え食料品が底をつき始めた中で起きてきたのが、「食料調達班にはより多くの食料を配布しろ」と要求するアルカディ(サム・スプルエル)を中心とした不穏な動き。折りしも、チフスが伝染し始める中、トゥヴィアの咳もひどくなり、体調は悪化。さあそ

んな状況下、トゥヴィアはアルカディらに対してどんな対応を？

幸いなことに2009年1月現在、中国もロシアもキューバも政権移行はスムーズに進んでいるが、最もヤバイのが北朝鮮。さらに、西欧化、NATO加盟を進めてきたウクライナも、ロシアの「反撃」を受けてゴシチェンコ大統領とティモシェンコ首相との対立が深まっているようだから恐い。さあ、食料品が底を尽き、チフスが蔓延している極寒の森の中、リーダーの座をめぐる権力闘争の行方は？

こんなギリギリの姿を見ていると、迷走する麻生政権を冷やかに評論し、そんな政局をワイドショー化して楽しんでいる日本は、何と平和で能天気な国・・・。

艱難辛苦は若者を成長させる糧

あの寒さと食料不足そしてチフスの危機をトゥヴィアたち一行が乗り切ることができたのは、ソ連赤軍に合流していたズシュの協力があつたため。つまり、ソ連赤軍からペニシリンの支給を拒絶されたトゥヴィアはズシュの協力を得て、村の警察署を襲ったわけだ。そんな苦労を共にしても、なお2人の仲は元に戻らなかったが、長い艱難辛苦の中、大きく成長してきたのが三男のアザエル。

トゥヴィアたちのキャンプは次第に本格的になってきたが、そうしなければ敵に発見される可能性が高くなるのは仕方なし。トゥヴィアたちはそのための警備を怠らなかったが、その努力の甲斐あって、ある日伝令のドイツ兵を捕らえたのは殊勲大。しかし、その伝令書には森の中への大攻勢が記されていたから大変だ。そんな情報をいち早く入手したソ連赤軍は撤退準備を整えていたが、これはあくまで自分たちの部隊だけ。そうすると、森の中に残されたトゥヴィアたちの命運は？

ドイツ軍の攻勢は飛行機による空爆を伴う大規模なものだったが、その後ドイツ歩兵が襲ってくること必至。アザエルは男たちと共に時間稼ぎの銃撃戦のため残り、トゥヴィアは老人や女子供を率いて脱出を試みたが、その行き先は？時あたかも、モーゼがユダヤの民を率いた出エジプト祭日。やっと脱出できたと思ったとたん、一行の目の前に広がるのは大きな湿地帯。これでは前門の狼、後門の虎状態で万事休す。そう思えたが、そこでモーゼの奇跡を呼び起こすべく「やれば、できる。神はモーゼのために紅海を裂いた。僕らに奇跡はない！奇跡は自分たちで起こす」と宣言したのが、ドイツ軍を撃退して合流してきたアザエル。

このアザエルの力強い宣言に一行は最後の勇気を振り絞り、果敢に川の中へ進んで行ったが、一行の艱難辛苦がさらにこの後も続くことは確実だ。しかして、こんな艱難辛苦がアザエルという若者を大きく成長させることに・・・。

絶体絶命の状況下、どんな奇跡が？

チャールトン・ヘストン主演の『十戒』(56年)の海が割れるシーンは、当時大きな話

題を呼んだスペクタクルシーンだったが、『ディファイアンス』におけるトゥヴィアたちの湿地帯への行進は、ただ渡れることを信じて前へ進むだけの地味なもの。しかしこの映画では、その後最後のハイライトシーンが登場する。

それは、やっと湿地帯を渡り終えてひと息つく一行に、戦車を伴った新たなドイツ兵が攻撃を仕掛けてくるシーン。トゥヴィアたちは直ちにそれを迎え撃つ体制をとったが、いくらトゥヴィアたちが機敏に動いても、戦車の前に歯が立つはずはない。私を含む誰もがそう思うはずだが、そこで起きた奇跡とは？これを乗り切ったからこそ、彼らは3年間も森の中で生き延びることができたわけだ。

そんな感動のハイライトシーンは、是非あなた自身の目でしっかりと。

2009(平成21)年1月13日記

三兄弟の新たなユダヤ人保護伝説とは？

だん(や亀田)の三兄弟は有名だが、こんな感動的なユダヤ人三兄弟の物語があったとは知らなかった。第二次大戦最中の一九四一年、旧ソビエト連邦内ペラルシ。ナチスドイツの東欧侵略に伴うユダヤ人狩りの中、トゥヴィア、ズシユ、アゼル三兄弟は命からがら深い森の中へ。食料も武器もない中、次々と増え続ける女性と子どもを

「ディファイアンス」
(14日からTOHOシネマズ梅田ほかで公開)

弁護士 坂和章平のLAW DE SHOW

65

「ディファイアンス」
(14日からTOHOシネマズ梅田ほかで公開)

中、彼はいかに集団をまとめベストの選択を続けたの？日本の政局は末期症状を呈しているが、こんな極限下での彼の決断から学ばべきものは多い。

観望は若者を成長させる糧。集団の前に立ちほだかる川を前に三男は、「やればできる。奇跡は自分たちで起こせ」と宣言し、紅海を裂いた『十戒』(五六年)のモーゼのように敢然とユダヤの民を率いたが、彼ら

む逃避者はそこいかなる共同生活を？
ナチスの虐殺から多くのユダヤ人を救ったオスカー・シンドラの物語『シンドララーのリスト』(九三年)で有名だが、原作『ディファイアンス』を人間味たっぷりに追わせた三兄弟は、追われても動物じゃない。生きようとして命を失うなら、それは人間らしい死に方だ」と宣言する姿勢は感動的だ。

地味な映画だが、長男役に「007」シリーズで大人気のダニエル・クレイクを起用したのがミソ。ソ連のバルチザンに合流する武闘派の次男と対立しながら、「生き残ることが復讐だ。追われても動物じゃない。生きようとして命を失うなら、それは人間らしい死に方だ」と宣言する姿勢は感動的だ。

敵寒下で食料が尽きる

の行く手には戦車を含む独軍との更なる激戦が。さて三本の矢が真に結果するのはいづ？

独軍崩壊までの三年間を森の中で見事に生き延びた三兄弟と二百人の「村民」たちの思い、いかに？戦後六十四年間平和を享受してきた日本人は、この映画から真先にその恩恵を受け止めるべきだ。

大阪日日新聞 2009(平成21)年2月7日